

べと病菌によるハナヤサイの“入れ墨”症状¹⁾

山 本 勉

(徳島県農業試験場)

徳島県のハナヤサイは徳島市(川内, 応神, 住吉各町), 板野郡藍住町を中心に約37haが栽培され, その作型も初冬どり, 冬どり, 晩冬どり, 春どり, 晩春どりと多様で, それぞれの作型に対応した品種が栽培されている。ところが最近, 一部の品種の花梗(主枝, 分枝)に, これまでみられなかった“入れ墨”状の小斑を生じ, 品質を著しく低下させて問題になってきた。

調査の結果, これがべと病菌によるものであることが明らかになった。べと病菌による“入れ墨”症状については, 最近重松・橘(1977)が高冷地ダイコン根部の同症状について詳しく報じているが, ハナヤサイについては阿部が, 「茎, 花梗に黒紫色の斑点を生ずる」と述べているにすぎず, 筆者の知る範囲では一般の成書にも葉の病徴の記載だけにとどまっているので, ここにその病徴を紹介しておきたい。

発生が多いのは初冬どり(10月下旬~11月下旬)の白菊品種で, 収穫期が近づいて発生が目立ってくる。

病徴は花蕾の表面の一部に径0.5~1.5cmくらいの水浸状汚斑を生ずる。病斑は古くなると淡褐色から黒褐色に変わる。花蕾が発育途中で侵されるとその部分の生育が妨げられてややくぼむ。花蕾を割ってみると, 病斑を生じた花梗には褐色しないし黒色, 大小不整形の病斑がみられる。この病斑は表皮下に生ずるために輪かくは不明瞭で“入れ墨”状に黒ずんで見える。また病斑はわずかにくぼんでいることが多い。発病して時間の経ったものでは隣接の花梗も発病しているが花蕾の部分は健全である。したがって初発生の場合とちがって, 花蕾から組織を通して発病したものでないことだけは明らかであるが, 主枝を通して拡がったものか, 2次感染したものかは不明である。病斑を生じた花梗を切ってみると, 普通は表皮の下が暗褐色に変わっているが, ときにはかなり深く, 花梗の中心部付近に褐色斑点の見られることもある。変色した部分の切片をつくって検鏡すると, 菌糸が細胞間隙を迷走し, 細胞内には吸器の挿入がみられ, この“入れ墨”状の病斑がべと病菌によることを示す。発病した花蕾を湿室に入れておくと病斑上に分生子梗, 分生子を生ずることがあるが決して多くはなく, 花梗の病斑上にはほとんど形成されない。

花蕾に発病がみられるときには葉にも病斑がかなり発生しており, これに形成された胞子の形状, 大きさは花蕾に形成されたそれと同様であり, 両者が同じべと病菌によるものとみて誤りはなからう。

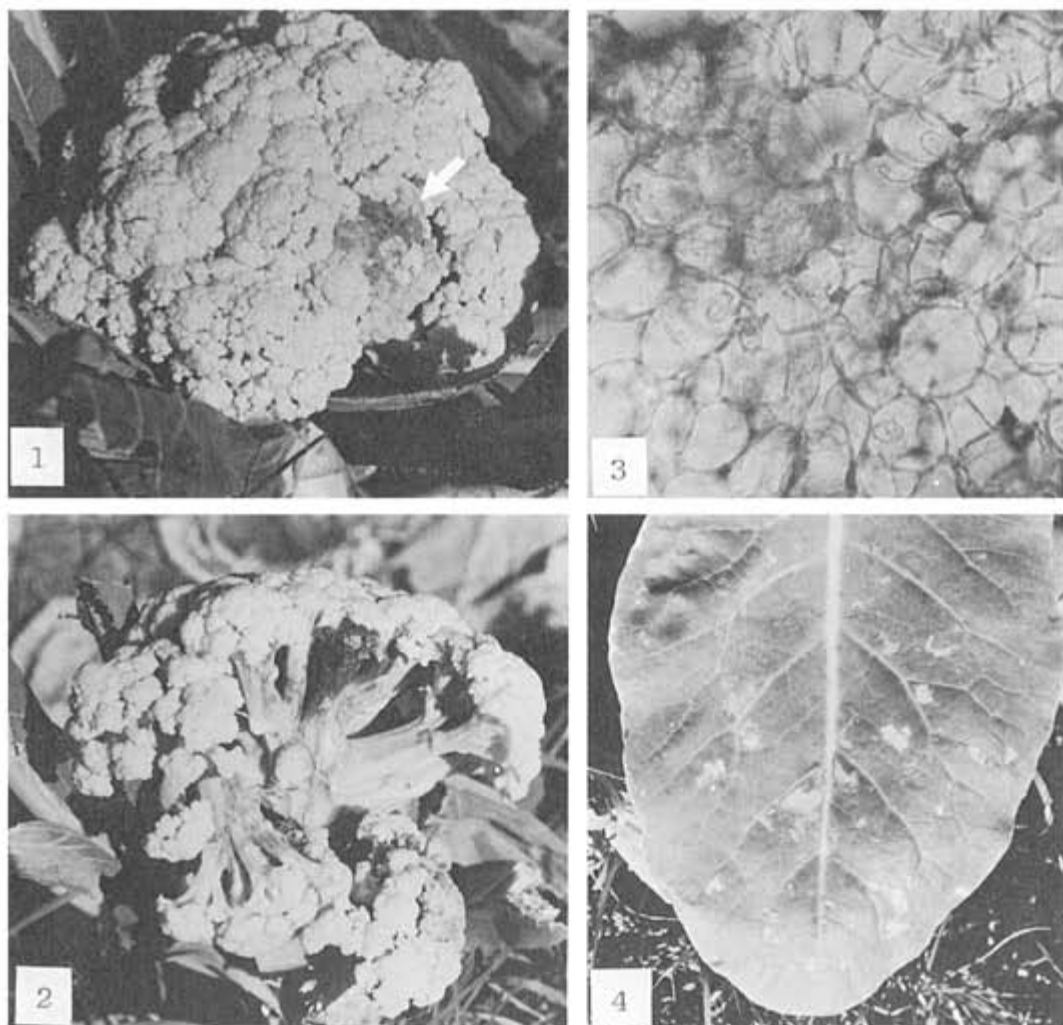
1) 'Irezumi' like symptom of cauliflower caused by *Perenospora brassicae* GAUMANN.
By Tsutomu YAMAMOTO.
Proc. Assoc. Plant Protec. Shikoku, No.14:43-44 (1979)

引用文献

阿部善三郎：原色病害虫診断防除編3，野菜茎葉菜，ハナヤサイ 農文協，東京。

重松喜昭・橋泰宣（1977）：べと病菌による高冷地特産秋大根の根部黒変症“イレズミ症状”について，四国植防，12：25～31。

（1979年3月受領）



第1図 花蕾に生じた病斑（矢印）
第2図 花梗に生じた“入れ墨”症状
第3図 “入れ墨”症状の変色細胞内にみられる吸器
第4図 葉に生じたべと病の病斑
（以上いずれも白菊品種）